

上皇后陛下 卒寿の慶びに寄せて

しみず たかし
清水 崇史
(しがく総合研究所)

令和6年10月20日、上皇后陛下が卒寿を迎えられることに際し、深い敬意と感謝の念を込め、心よりお祝い申し上げます。

はじめに個人的な話で恐縮だが、筆者は一度、上皇上皇后両陛下とお話をさせていただいたことがある。平成最後の9月、皇居勤労奉仕団の団長として皇居の清掃活動をしたときのことだ。蓮池参集所で両陛下をお迎えした際、緊張感とともに温かさが満ちる不思議な感覚に包まれる。

が崩御された際に、極左暴力団・日本赤軍・日本共産党が「反皇室キャンペーン」を繰り返すなど、現在とは異なる皇室観が残っていたのが平成初期の日本である。

しかし、平成の30年間で、国民の皇室に対するイメージは大きく改善した。令和元年のNHKによるアンケート調査では、71%が皇室に親しみを感じており、69%が「平成以降、皇室と国民の距離は近くなった」と答えている。

昭和天皇は平和への強い想いを持たれており、敗戦後の全国ご巡幸など積極的に行動されていた。しかし、お立場や御病気の関係で晩年は満足に動けないこともあった。その想いを引き継ぎ、度重なる被災地への訪問や激戦地での戦没者慰霊など、新時代の天皇の在り方を示されたのが上皇上皇后両陛下である。

上皇后陛下は、歴代の皇后の中で最も多くの

上皇后陛下が猿田彦神について微笑みながらお話しくださったときの感動は、今も心に深く刻まれている。

本稿では、上皇后陛下のあゆみを振り返りながら、その御心に対する感謝の念を綴りたい。

平成時代の皇室観の変化

上皇陛下が即位されたころ、マスコミは皇室を批判する報道を繰り返していた。また昭和天皇

メッセージを国民に発信された方である。たとえば、平成8年に日本看護協会で「時としては、医療がそのすべての効力を失った後も患者と共にあり、患者の生きる日々の体験を、意味あらしめる助けをする程の、重い使命を持つ仕事が見護職」であると語られている。このような深い洞察からなる言葉に心を打たれた方は少ないであろう。

両陛下の30年間にわたるご努力により、皇室と国民の絆が深まっていったのだ。

苦難を乗り越えられた半生

上皇后陛下が皇室に入られたご決断は、計り知れないご覚悟が必要だったであろう。上皇陛下は求婚される際に、公務が何より優先される旨を述べられている。それを承知の上で、自由な人生を捨てることを、ご決断くださったのだ。

危険な目に遭われることもあった。昭和34年の御婚礼のパレードでは、暴漢に石を投げつけられ、昭和50年にはひめゆりの塔で火炎瓶を投げられるという恐ろしい経験をされている。それにも関わらず、両陛下は事件直後も、晴れやかな顔で国民の前にお姿を見せられた。

また、度重なる批判にも直面された。たとえば、ご結婚にあたり、国民に「ミッチー・ブーム」が広がる一方で、「平民出身だから」という理由で、強く反対する意見も存在した。また、お子様の育成に関して、皇室の伝統である乳人制度を廃止し、ご自身で愛情をかけて育てられる決断をした。それを多くの国民は当然のこととして受け止め、上皇后陛下が書かれたノート「ナルちゃん憲法」が話題になる。しかし、「先例・前例と異なる」と反対する人々も一部にいた。他にも事実無根のバッシングが繰り返された。

大切にされた

「国民と苦楽を共にする」皇室像

上皇后陛下は、こうしたご苦勞を乗り越え、上皇陛下とともに全身全霊をもって公務に取り組まれてきた。その根底にはどのような想いがあるのだろうか。

平成21年、ご結婚50周年の記者会見で上皇后陛下は、皇室の伝統に関する質問に対して、次のように答えられている。

「伝統には表に現れる型と、内に秘められた心の部分とがあり、その二つが共に継承されていることも、片方だけで伝わってきていることもあると思います。WBCで活躍した日本の選手たちは、鎧も着ず、切腹したり、ゴザルとか言っではおられなかったけれど、どの選手も、やはりどこか『さむらい』的で、美しい強さをも

たことによるご心勞が重なり、上皇后陛下は平成5年にお倒れになり、失声症も患われている。そして、上皇陛下と共に歩まれる中での葛藤と決意に関する御歌を、平成28年に詠まれている。

「ためらひつつ さあれども行く 傍らに 立たむと君の ひたに思せば」

（果たして被災者のお役に立てるのだろうかかと「ためらい」の気持ちがある。しかし、上皇陛下（当時は天皇）が、災害に苦しむ国民の傍らに立ち、その声に真摯に耳を傾けることをひたすらにお考えであるので、私も共に被災地にいく。）

こうした我々では想像し難い茨の道を歩まれた上皇后陛下に対し、上皇陛下は60歳のお誕生日に「温かみのある日々の生活により、幸せを得たばかりでなく、結婚を通して自分を高めたように感じています」と語られている。

って戦っておりました」

この言葉から、上皇后陛下が伝統の形式を守ること以上に、内面を重視されていることがわかる。そして、その最も重要な皇室の伝統とは、上皇陛下や天皇陛下が繰り返しておっしゃる「国民と苦楽を共にする」ことであろう。上皇后陛下も「困難な状況にある人々に心を寄せることは、私どもの務めであり、これからも更に心を尽くして、この務めをはたしていかなければならぬ」と語られている。

御即位10年の記者会見で上皇后陛下は、「（天皇陛下は）国民の叡知がよい判断を下し、人々の意志がよきことを志向するよう常に祈り続けていらっしやる」と述べられている。

皇室の方々への感謝を示すためにも、我々国民がよい判断を下し、よきことを志向できるよう、精進することが求められているのだ。

